



3月22日から始まる春のセンバツ大会。残念ながら日立一高
出場の夢は叶わなかった。

昨年11月に茨城県高校野球連盟から、第85回記念選抜高校野球大会の「21世紀枠」候補に県代表として推薦された日立一高。秋季関東地区野球県大会でのベスト8入り、進学校として文武両道を実現していることや野球部による東日本大震災被災地でのボランティア活動、そのほか狭い練習スペースでの創意工夫した練習などが評価された。

その後、「21世紀枠」関東・東京地区代表にも選出され、甲子園出場が大いに期待された。

しかし、1月25日の最終選考で、惜しくも漏れ、夢の舞台にあと一步届かなかった。



県推薦校の表彰状授与の様子

結果は残念だったが、評価された(最終選考まで残れた)自信と、素晴らしい経験(甲子園でのプレイを意識できたこと)を生かし、今後のさらなる成長と夏の大会での活躍を期待したい。

以下、白亜の球児たちの素晴らしい活躍を顕彰するとともに、記録として残すことを目的に、最終選考日の翌日以降の新聞に掲載された、関係者のそれぞれの思いや、今後の決意、あるいはエールなどを改めて紹介する。

郡司校長 (産経新聞)

出場がかなわなかった日立一高は、郡司文児校長がグラウンドに集まったナインに落選を報告。「残念だったが、地域に希望を与えてくれてありがとう」と声をかけた。

中山監督 (朝日新聞)

中山頭監督は、「甲子園を意識することで、いい緊張感の中で練習ができ、日に日に成長していることがわかった。夏は甲子園という舞台で花を咲かせられるような言葉だけでなく、本当にがんばろう。やれる。」と選手に奮起を促した。

川田主将 (産経新聞)

川田貴大主将は、「21世紀枠の候補に選ばれたことは、自信につながった。夏に向けて、しっかりと練習していきたい。」と力強く話した。

OB会 (茨城新聞)

野球場には同校OBらも待機

していた。1985年夏に初の甲子園に導いた小泉陽一元監督は「投手がよかっただけに甲子園に行かせたかった」と残念がり、鈴木信夫OB会長は、「練習に打ち込み一流のチームに負けないようになっしてほしい」とエールを送った。

日立市長 (毎日新聞)

吉成明日立市長は、「東日本大震災からの復興に取り組み中で、21世紀枠の最終選考に残れたことは素晴らしい。市民に勇気と希望を与えてくれた。これからも選手の活躍を市民とともに応援していきたい」とコメント出した。

被災地訪れ、岩手・大槌高と交流 野球できる喜び再確認 (毎日新聞)

「甲子園でまた会おう」
エースの加賀屋諒投手(2年)は、東日本の被災地、岩手県立大槌高校で出会った野球部員の言葉が忘れられない。12年2月25日、同校の監督が中山監督の大学時代の後輩という縁で、交流が実現した。

きっかけは、11年11月、同校の球児たちを取り上げたテレビ番組を見たこと。がれきの山を横目にキャッチボールをする映像など、依然として深刻な被災地の状況に「毎日野球ができる自分たちは恵まれている。何か力になりたい」と部員たちが被災地での

ボランティア活動を提案。効率的に活動できるよう、集団行動を学び、2月24日から3日間、岩手県を訪問。仮設住宅への弁当配達や小学校の仮設校舎への引越作業の合間を縫って、大槌高を訪れた。

大槌高は校舎が高台にあったため難を逃れたが、転校を余儀なくされる部員が出たり、グラウンドが自衛隊の活動拠点になったりし、練習もままならない状況だった。交流時間は短かったが、交わした言葉から、「大槌の選手たちは本気で甲子園を目指している」と感じた。「グラウンドが狭い」「練習時間が短い」など、何の言い訳にもならない。

選手たちは日立に帰り「もっと一球一球を大事にしよう」と決めた。「野球ができる喜びを感じながらプレーすれば、一球も無駄にできない」と川田貴大主将は話す。校内の清掃活動にも取り組み、「何事にも必死に取り組み姿勢」を身につけた。秋季県大会準々決勝では、第1シードの強豪・霞ヶ浦を相手に粘りの野球で2対3と1点差にまで迫る善戦を見せた。

あれから1年近く。センバツ出場はならなかったが、「21世紀枠の最終候補まで残り、チームがやってきたことは間違っていない」と思う。これを継続していけば、甲子園に行ける。

加賀谷投手は大槌での約束をかみしめながらマウンドに立つ。



被災地でのボランティア活動



(編集後記)
元ニューヨーク・ヤンキースの松井秀喜氏は、結果が出ないとき次のような言葉を残している。「僕はコントロールできない過去よりも、変えていける未来にかけます」と。
この言葉の意味は、どれだけ努力しても、どれだけ力を注いでも過去の事実は変えられない。しかし、未来は……。
未来(夏)にかける！白亜の球児達!!